

新訳グリム童話三編

— KHM五五、六五、一九一 —

グリム兄弟・編
梅内幸信・訳

『ルンペルシュティルツヒエン』（KHM五五）

むかしむかし、あるところに粉ひきがおりました。粉ひきは、貧しかったのですが、粉ひきには美しい娘が一人おりました。あるとき、粉ひきは、たまたま王さまにお会いしたときに、もったいぶって、王さまに言いました。「わたくしには、娘が一人ございますが、娘は、ワラをつむいで、金の糸にできるのです。」王さまは、粉ひきに言いました。「そういった技がのう、わしは大好きなのじゃ。そなたの娘が、そなたの言うように、ほんとうに腕がたつのなら、娘を、あすわしの城へつれてまいれ。わしが、娘の腕をためしてみよう。」いよいよ、娘が王さまのところへつれてこられると、王さまは、娘をワラがいつぱいつまっている部屋へつれてゆき、糸車と糸巻をわたして、言いました。「さあ、仕事にかか

るがよい。もし、おまえが、ひと晩かけて、あすの朝までに、このワラをつむいで金の糸にしておかなければ、おまえの

命いのちはないと思おもえ。」そう言うと、王さまは、自分じぶんでその部屋へやに鍵かぎをかけましたので、娘むすめは、部屋へやに独ひとりとり残のこされました。さて、かわいそうな粉こなひきの娘むすめは、部屋へやの中なかに独ひとり座すわっておりましたが、どうしてよいものやら、ひどく途方とほうにくれました。どうしたらワラをつむいで金の糸いとにできるのか、まったく分かりませんでした。娘むすめは、ますます不安ふあんになりましたので、しまいには泣なきだしてしまいました。そのとき、とつぜん扉とびらが開ひらいて、一人ひとりの小人こびとが入はいってきて、言いいました。「こんばんわ、粉こなひきのお嬢じょうちゃん。どうして、そんなに泣ないてるの？」娘むすめは、答こたえました。「あのねえ、あたしワラをつむいで金の糸いとにしろって言いわれているんだけれど、それができないの。」小人こびとは、言いいました。「おまえさん、おいらになになにくれる？ おいらが、おまえさんのかわりにつむいであげたらね。」

「あたしの首くびかざりをあげる」と、娘むすめは言いいました。小人こびとは、首くびかざりを受うけとると、糸車いとぐるまの前まえに座すわって、ブーン、ブーン、ブーンと三べん回まわすと、糸卷いとまきは糸いとでいっばいに巻まかれました。すると、小人こびとは、別べつの糸卷いとまきをはめて、ブーン、ブーン、ブーンと三べん回まわすと、二番目にばんめの糸卷いとまきも、糸いとでいっばいに巻まかれました。こうして、仕事しごとが朝あさまで続つづけられると、ワラは全部ぜんぶつむがれて、すべての糸卷いとまきは、金きんの糸いとでいっばいになりました。日ひがのぼると、さっそく王おうさまはやってきて、金の糸いとを見みると、おどろいて喜よろこびましたが、王おうさまの心こころは、ますます金きんが欲ほしくなるばかりでした。王おうさまは、粉こなひきの娘むすめを、ワラをつまっている別べつの部屋へやへつれてゆかせました。この部屋へやは、前まえの部屋へやよりはるかに大おおきかったです。王おうさまは娘むすめに、命いのちがおしければ、この部屋へやのワラも一晩中ひとばんじゅうにつむぐのじゃ、と命令めいれいしました。娘むすめが、どうしてよいやら分わからずに、泣ないていると、またしても扉とびらが開ひらいて、れいの小人こびとがあらわれて、言いいました。「おまえさん、おいらになになにくれる？ おいらが、おまえさんのかわりにワラをつむいで金の糸いとにしたらね。」あたしの指輪ゆびわをあげる」と、娘むすめは答こたえました。小人こびとは、指輪ゆびわを受うけとると、今度こんども糸車いとぐるまをブーン、ブーン、ブーンと回まわして、朝あさまでにワラを全部ぜんぶつむいで、キラキラ輝かがやく金の糸いとにしてしまいました。王おうさまは、このようすを見ると、ことのほか大おお喜びよろこびでしたが、まだまだ金きんに

は飽き足りず、粉ひきの娘を、ワラのつまっている、さらに大きな部屋へつれてゆかせて、娘に言いました。「このワラも、今晚中につむぐのじゃ。もし、これがおまえにうまくできたら、おまえをわしの妻にしてやろう。」「たかが粉ひきの娘とはいえ、国中さがしても、これいじょう金持ちの女はおるまい」と、王さまは考えたのです。娘が独りになると、また小人が三度目にあらわれて、言いました。「おまえさん、おいらになにしてくれる？　もし、おいらが、おまえさんのかわりに、今度もワラをつむいであげたらね。」「あたし、あげられるようなもの、もうなんにももってないわ」と、娘は答えました。「それじゃ、おいらに約束しな。もし、おまえさんが、お妃さまになったら、生まれた最初の子どもをくれるってね。」「このさき、どうなるのかだれにも分かりやしない」と、粉ひきの娘は考えましたし、実際、ひどく困って、どうすることもできませんでした。そこで、娘は、望みのものを小人に約束してしまいました。すると、小人は約束通り、もう一度ワラをつむいで、金の糸にしてくれました。朝になって王さまがやってきて、すべて望み通りになっているのを見ると、王さまは娘と婚礼の式をあげ、粉ひきの美しい娘は、お妃さまになりました。

一年たつと、お妃さまは、かわいい子どもを産みましたが、小人のことはすっかり忘れておりました。ところが、小人は、とつぜんお妃さまの部屋にあらわれて、言いました。「さあ、おまえさんがおいらに約束したものを、おいらにくれよ。」お妃さまは、びっくりぎょうてんして、子どもをとらずにいてくれるなら、国中の宝を全部あげると申し出ました。けれど、小人は、言いました。「だめだよ、おいらには、生きているものの方が、世の中のどんな宝よりもいいんだから。」すると、お妃さまは、ひどく嘆き悲しみ、泣きだしましたので、小人は、お妃さまを気の毒に思つて、言いました。「三日間考えるひまをあげよう。もし、おまえさんが、それまでにおいらの名前を言い当てたら、子どもをうばわないことにしよう。」

さて、お妃さまは、一晩中、それまで聞いたことのある名前を全部、よく思い出してみました。そのうえで、使いの

者を一人出し、それいがいの名前を求めて、國中あちこちたずねさせました。次の日に小人がやってくると、お妃さまは、カスパーク、メルヒオール、バルツァー、バルツァーかいというふうにして、自分の知っている名前を全部、次から次へと試みてみましたが、どの名前を聞いても、小人は、「そんなの、おいらの名前じゃないよ」と言うばかりでした。二日目になると、お妃さまは、おとなりの国々では、どういう名前があるかを、あちこち聞いて回らせ、小人に、いちばん変わった、いちばん珍しい名前をあげてみました。「おまえの名前は、ひよつとしてリッペンビーストかい、ハンメルスヴァーデーかい、それともシュニールバインかい？」ところが、その答えは、いつも「そんなの、おいらの名前じゃないよ」でした。三日目に、使いの者がもどってきて、報告しました。「新しい名前は、一つとして見つけることができませんでしたが、ある高いお山の森のはずれにたどりつき、キツネとウサギも、おやすみなさい、と言うころ、小さな家を一軒見つけたのでございます。その家の前には、火がたかかれています、火のまわりを、それはもうおかしな小人が、一本足でピョンピョン飛びはねて叫んでおりました。

きようはパン焼き、あすは酒作る、

あさつて妃の子をば、手に入れる。

ああ、楽し、だあれも知らねえとは、

ルンペルシュテイルツヒエン、これがおいらの名前は！」

この名前を聞いたとき、どんなにお妃さまが喜んだか、みんなにも分かるでしょうね。やがて、まもなく小人がやってきて、たずねました。「さあ、お妃さま、おいらの名前は、なんじゃろな？」お妃さまは、最初に、たずねました。「お

まえの名前は、クンツかい?」「はずれ。」「おまえの名前は、ハインツかい?」「はずれ。」「おまえの名前は、ひよつとして、ルンペルシユティルツヒエンかい?」「悪魔から教えてもらつたな、悪魔から教えてもらつたな」と、小人は叫び、怒つて右足ではげしくじたんだを踏みましたので、小人の体は、腰まで地面にめりこんでしまいました。すると、小人は、怒り狂つて、左足を両手でつかむと、自分の体を真つ二つに引き裂いてしまいました。

『千枚皮』(KHM六五)

むかしむかし、あるところに王さまがおりました。王さまには、金の髪のお妃さまがあり、お妃さまは、それはもう美しく、この世にくらべる人がいないほどの美人でした。ところが、お妃さまは、病にふせてしまいました。そうして、お妃さまは、まもない死を感じると、王さまをお呼びになつて、言いました。「わたくしが死んだのち、もし、また結婚なさるおつもりであるならば、わたくしと同じくらい美しく、わたくしと同じような金の髪の人でなければ、結婚なさらないでください。このことを、わたくしにかたくお約束ください。」王さまが、このことをかたく約束すると、お妃さまは、目をつむり、亡くなつてしまいました。

王さまは、長い間悲しみにくれ、二度目のお妃をむかえるなど思いもありませんでした。とうとう、王さまの相談役たちが言いました。「わたくしどもが、お妃さまをいただけますよう、王さまにはもう一度結婚してもらうしかありません。」そこで、あちこちに使いのものが出されて、美しさにおいて、お亡くなりになつたお妃さまに匹敵するような美人の花嫁がさがし求められました。ところが、世界中をさがして、たとえ美人が見つかつたとしても、お亡くなりになつたお妃

さまのような金の髪の人はおりませんでした。こうして、使いのものたちは、目的をはたせず、国にもどってきました。さて、王さまには、一人の娘がありました。この娘は、お亡くなりになった母親とそっくりの美人で、また、そっくりの金の髪をしておりました。娘が大きくなったとき、王さまは、あるとき娘を上げしげと眺めましたが、娘がなになにまで、お亡くなりになったお妃さまに似ていることに気づくと、王さまは、きゆうに娘にはげしい愛情を感じました。そこで、王さまは、自分の相談役たちに言いました。「わしは、娘と結婚するつもりじゃ。娘は、わしの亡くなった妃とより二つじゃし、それがいには、あれとそっくりの花嫁を見つけることができんのじゃからのう。」相談役たちは、これを聞くと、びつくりぎょうてんして、言いました。「父親が実の娘と結婚することは、神さまが禁じております。罪深いことから、良い結果が生まれたためはございません。お国も、その災いをこうむって、滅びることになりますよ。うぞ。」娘は、父親の決心を耳にすると、相談役たちいじょうにびつくりぎょうてんしましたが、それでも、父親にそういう考えを思いとどまらせる望みを捨ててはいませんでした。そこで、娘は、王さまに言いました。「わたしが、おとうさまの願いをかなえます前に、まず、わたしは、三着の衣装をいただきます。その一着は、お日さまのように金色に輝くもの、もう一着は、お月さまのように銀色に輝くもの、最後の一着は、お星さまのように青白く輝くものをいただきます。さらには、千種類の毛皮から作られました外套を一着いただきます。そのためには、おとうさまのお国にすむ動物という動物がみな、その皮を一切れずさしださなければなりません。」そのとき、娘は、考えたのです。「こんなものを手に入れるなんて、とてもできないことなんだから、これでおとうさまの変なお考えを思いとどまらせられるわ。」ところが、王さまは、思いとどまるようすもなく、国中でいちばんはた織りのじょうずな乙女たちに、三着の衣装を織らせました。一着は、お日さまのように金色に輝くもの、もう一着は、お月さまのように銀色に輝くもの、最後の一着は、お星さまのように青白く輝くものを織らせました。それから、召しかかえていた狩人たち

には、国中の動物を全部捕えさせて、その一匹一匹から一切れずつ皮をはがさせました。そうやって、千種類の毛皮から一着の外套が作られました。とうとう、すべての部分がぬい合わせられると、王さまは、その外套をもつてこさせ、それを娘の前にひろげて、言いました。「あすは結婚式じゃぞ。」

今となつては、おとうさまの決心を変える望みもはやたれたとさとると、お姫さまは、逃げだす覚悟をかためました。みんなが寝静まった真夜中に、お姫さまは、起きあがると、自分の宝箱の中から、金の指輪、小さな金の糸車、小さな金の糸巻の三つのものを取り出しました。お日さまとお月さま、お星さまの衣装三着を、お姫さまは、クルミの殻の中へしまいこみ、千枚皮の外套をはおり、顔と両手にススを塗って、真つ黒にしました。これがすむと、お姫さまは、運を神さまにおまかせし、お城を出て、夜通し歩くと、大きな森の中へやってきました。お姫さまは、つかれましたので、木の洞の中へ入って、眠りこんでしまいました。

お日さまがのぼりましたが、お姫さまは、眠り続け、真昼になつても、まだ眠り続けたままでした。その日、この森を所有している王さまが、たまたまこの森で狩をしておりました。王さまの獵犬たちは、その木のところにやってくると、鼻をクンクンさせてにおいをかぎ、木のまわりを走り回って、ワンワンほえたてました。王さまは、狩人たちにむかつて言いました。「どんなけものがあるかにひそんでいるのか、見てまいれ。」狩人たちは、命令にしたがつて、見て、もどつてくると、言いました。「あの木の洞には、わたくしどもが、ついぞ見たことのないような、きみようなけものが一匹おります。その体は、千種類の皮におおわれております。けものは、横になつて眠っております。」王さまは、言いました。「よいか、生けどりにできるかやってみて、うまくできたら、馬車にしぼって、つれ帰るのだ。」狩人たちが、娘につかみかかると、娘は、目をさまし、ひどくおびえて、狩人たちにむかつて叫びました。「あたしは、父母にも見捨てられた、あわれな子どもです。どうか、あわれんで、いっしょにつれていってください。」

「千枚皮、おまえは、台所仕事にぴったしだ。さあ、いっしょにこい。台所で灰をかき集めるがよかる。」こうして、狩人たちは、千枚皮を馬車にのせ、お城につれ帰りました。お城につくと、狩人たちは、千枚皮に、階段の下にある、日のさしこまない小さな家畜小屋をあてがって、言いました。「千枚皮のおチビ、おまえは、ここで寝起きするがよかる。」それから、千枚皮は、台所にやられ、そこでまきや水を運んだり、火をおこしたり、鳥の羽をむしったり、野菜をより分けたり、灰をかいたり、いやな仕事は、なんでもしました。

こうして、千枚皮は、長い間、ほんとうにはじめなくらしをしておりました。ああ、美しいお姫さま、あなたの運命は、これからどうなることでしょうか！ ところが、あるとき、お城で宴会が開かれることになると、千枚皮は、料理番に言いました。「ちよつと上へあがつて、ようすを見てきてもよろしいでしょうか？ 戸口の前に立って、外から中を見るだけでございますから。」すると、料理番は、答えました。「いいとも、見ておいで。でもな、三十分たったら、またここにもどつてきて、灰をかきあつめるんだぞ。」そこで、千枚皮は、小さなランプをもつて、自分の家畜小屋に入ると、毛皮の外套をぬいで、顔と両手に塗つてあるススを洗い落としました。すると、千枚皮の美しさが、もどおり完全にあつた。それから、千枚皮は、クルミをあけて、衣装を取り出すと、それは、お日さまのように、金色に輝きました。したくがすむと、千枚皮は、宴会場へとあがつて行きました。すると、いあわせた人人は、みんな道をあげました。というのも、だれも千枚皮を知りませんでしたので、人人はみな、この方は、どこぞのお姫さまにちがいない、と考えたからです。けれど、王さまは、千枚皮の方へやってきて、手をさしのべ、千枚皮と踊りました。王さまは、ひそかに考えました。「これほどまでに美しい人は、ついぞお目にかかったことがない。」踊りが終わると、千枚皮は、おじぎをしましたが、王さまがいあわせた人人を見回っているうちに、千枚皮は、姿をくらし、どこにいったのかだれにも分かりませんでした。お城の前に立っていた見張りたちが呼ばれて、問いただされましたが、だれも千枚皮の姿を見たもの

